

「この町にはわたしの民が大ぜいいる」

使徒行伝 18章 5節～11節

説教 軽込 昇 牧師

「パウロは一年六カ月の間ここに腰をすえて、神の言葉を彼らの間に教えつづけた。」(18章11節)「腰をすえて」一私の好きなことばです、ここにわたしの場所があると確信して、パウロはコリントに腰をすえ、キリストを語り続けました。そして、使徒行伝18章はパウロたちが意図的に異邦人伝道を開始した箇所として大切です。

主イエス・キリストの眼差しにユダヤ人、異邦人の区別はありません。復活された主イエスは、弟子たちに「あなたがたは行ってすべての国民を弟子とし」なさいと命じられました。(マタイによる福音書28章)すべての国民、囲いの中に今いない他の羊も(ヨハネによる福音書10章)、主イエスが願ってくださるから、主イエスを救い主として信じることができるのです。私たちがキリストを信じるのも、キリストが私たちの主であることを願ってくださったからです。

その時、パウロに「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。あなたにはわたしがついてる。だれもあなたを襲って、危害を加えるようなことはない。この町には、わたしの民が大ぜいいる。」(9～10節)の言が響きました。この言葉は以後2000年間教会を、伝道者を励ましてきました。

「わたしがあなたと共にいる」、これはわたしはいつもあなたの味方だ、というだけの意味ではありません。パウロと彼に反対する人たちの真ん中にキリストが立ってくださるということです。問題のない教会はありません。しかし、教会は主が真ん中に立ってくださることを信じて乗り越えてきました。

「この町には、わたしの民がおおぜいいる」、今はまだ教会に来られていないが、心の奥深くキリストを求めておられる方がたくさんおられます。30年前、前の教会の会堂建築のおり、献金趣意書に書きました。「あそこに行けば神さまに会える、そう思って安心してもらえる教会の建物を建てたい」と。今もそう思っています。

今朝、私は教会の前に着いてからしばらく、通りかかる人々を眺めていました。台風が近づいている中、5分間で10人通られました。その方々を見ているとき、今日、大阪教会で「この町にはわたしの民が大ぜいいる」と語る覚悟が

あるのかと、主イエスに強く迫られました。

教会は教会員だけで成り立っているのではありません。その背後にその10倍の家族、友人がいます。その10倍のひそかに心寄せる方、協力者がいるでしょう。今は、教会に体が向いていなくとも、それどころかそっぽを向いているような家族であっても、大阪教会が礼拝を守るための協力者です。多くの人がいて教会が教会として成り立つのです。

今、まだ主を信じないすべての人にも神のまなざしが注がれている。この人も神の恵みの中にいると、私たちは信じて祈っているか。また、一度洗礼を受け信仰を得たけれど、今は教会を離れている方のため、その方々の上にも、主イエスの恵みの御手が置かれていることを信じて祈っているか、と二つを強く問われたのです。

すべての人に、キリストが、あなたもわたしの民であると語りかけられています。主イエスの十字架の贖いの恵みをあふれんばかりに受けている私たちの責任は重い。礼拝を真剣に守ること、私たちの第一の務めであり、第二、第三の務めも同じ、これが伝道です。もちろん信仰は押し付けではありません。自発的な信仰心の発露を待つべきですが、同時に私たちが信じなければ、誰が信じるのでしょうか。私たちはやがてキリストにつながるすべての人の初穂です。

エレミヤ書29章は、バビロンに連れ行かれた人々に宛てたエレミヤの手紙です。「あなたがたはそこで家を建てて、そこに住み、……わたしがあなたがたを捕え移させたところの町の平安を求め、そのために主に祈るがよい」。旧約聖書における「敵を愛せ」の言葉だと言われます。今置かれたところの町の平安を祈る、それは神を信じ、私たちに注がれている神の眼差しを、まわりの人みなに伝えていくことです。

わたしたちが、この世に真実と正義が行われ、愛が満ちるように祈ること、この世の人々が神を信じる者になることを信じ、そのために祈り、礼拝すること、それこそ私たち教会が求められていることです。

この町の人のために祈る。今、ここで、今日から始めるべきことです。

(記 説教要約奉仕者)